「人生のこすれあう音」

東　徹也詩集

目次

＜目次＞

「プロローグ」

・ スターダスト

「ゼリービンズ・デイズ」

・ 名曲ハガキ・トランキライザー
・注意日
・「ゆっくり」
・１８歳の位置
・少年ナイフ
・クラバーのように
・ゼリービンズ・デイズ

「 コミュニケーション難民」

・ コミュニケーション難民
・ 地図上のふたり
・ 「さよなら」のバーゲン
・ デジタル砂漠
・ インディペンデンス・デイ
・ ドロップアウト・ワード
・ １６光年のスキンシップ

「 人生の音」

・ アダルト・チャイルド
・ 僕の起源
・ パラドックス・ライフ
・ フラッシュバック

・ ライフゲージ
・ 人生鉄道の夜
・ トラブルたち
・ コレクターズ・マインド
・ 迷い夢
・ 人生の音

「 エピローグ」

・ 夜間飛行

「 Ｐ．Ｓ．」

・おやすみ、ぱろうる

スターダスト

　　スターダスト

尾を引き始めていた

高度１万メートルの
飛行機から見えた

地球に
ピッタリと添うように描く
滑らかなカーブ

重すぎる願いは
似合わないな
と思わせるような
素敵な
軌道だった

本当に素敵なので
何かを託すのを
遠慮した

完全な幸福がないように
完全な不幸もないさ

と
少々荒っぽく
自分に言い聞かせて

そして消えた後に
その星自身の人生のことを
思った

名曲ハガキ・トランキライザー

　　名曲ハガキ・トランキライザー

市場拡大を目的とした
対世界戦略の
強力な展開が必要であり.....

机の上を占領する
昼間の会議の書類に
ため息をひとつ

「ふーっ。」
マーケティングって
いつもながら
ペンタゴンみたいだなと思う

うんざりさせる
書類の上にはふとＤＭが１枚

エリック・サティのような
絵画的なスコアを印刷した
ハガキ

指先にそれを載せて
蓄音機のように
クルン！　と廻す

部屋に
ピアノのおしゃべりが
あふれたような気がして

身も心も
人生も軽く

おやすみ
また　明日も
経済的に生き残るために

でも

経済的に生き残って
その後はどうしよう

サティの名言
「最後まで譲ってはいけない」

注意日

注意日

何でもない１日なのに
何でも迷う１日だった

新聞が
やけに騒々しく見えて

シマリスのように
落ち着かなくてさ

例えば
電車のドアの閉まるタイミングが
少しズレただけでも
不幸が広がっていく
気がした

不安を楽しむ
世紀末の詩人にはなれないし

何だか
変な音も聞こえた

静かに
心が軋む音だ

「ゆっくり」

　　「ゆっくり」

ラクダが
月の夜にやって来て

「ゆっくり」をかかえて
やって来て

僕の部屋に
置いていった

「ゆっくり」は
なかなか可愛いヤツで

僕は抱きしめたり
　　膝枕にしたり
　　添い寝したり.....

でも僕と「ゆっくり」との
蜜月は長く続かなくて

「ゆっくり」は
少しづつ微笑みながら
消えていった

僕は３日だけ喪に服して
またラクダに「ゆっくり」を
もらおうと電話をかけた

でもラクダは
留守番電話で
不在を告げた

受話器を置いた僕は
自分の人生を思い

そして消えてしまった
「ゆっくり」のことを

思った

そんな僕を
風に乗って流れてきた
遥かなラクダの鳴き声が
包みこんで

僕は訳もなく
泣きだした

１８歳の位置

　　１８歳の位置

ペットボトル何本分もの汗と
走っていた

コートの白いラインの上を
抜けていくボール

見ていた女の子は
髪が長くてね

あの頃は
夏があって
秋があって
そして
始まりには
終わりがあった

髪を切った女の子との
あの一瞬も.....

１８歳の位置

そこから
果てしなく卒業し続けて
ちょうど２倍の年齢

寿命がくる日には
今はどんな位置になるんだろう

少年ナイフ

少年ナイフ

何だか毎日
ナイフの上を
歩いているような気がする
ことがあってさ

裸足で

それとも
自分の居場所を
見失う感じ
いきなり学校に
テレポーテーションしてしまった
１４歳の登校拒否の男の子みたいに

そう

バランスを崩したら
痛そうな
日々

それでも
明日は必ず来るから

刃には刃を
心に武器を隠し持つ

クラバーのように

　　クラバーのように

何だか
街のリズムが
素手で刻めなくなってさ

６０年代は８ビートだったらしい
今は３２ビートでも遅く感じて

だからあらかじめ
プログラミングした音楽が欲しくなる

人がゆれて
時がゆれて

政治よりも
正義よりも

忙しいビートを信じて
すり減っていく感覚

毎日
取返しのつかないことを
し続ける気分の微分

ティー・ジー・アイ・エフ
金曜の夜　麻布のクラブ

グラスの向こうで踊る
クラバーたち

抵抗するかわりに
グルーヴして

彼らは
何処へ行けるんだろう

曲がり角をとうに過ぎて
フィズをあおる僕も

ゼリービーンズ・デイズ

　　ゼリービーンズ・デイズ

ゼリービーンズのような
毎日がいいね

あんまり磨いていない
ゴワゴワしたガラス壜に
幸せとか不幸せとかが
詰まっててさ

学校から帰ったら
２、３個つまんで
頬張った

なんであんなに
あの娘に夢中だったんだろう

なんであんなに
ケンカしたんだろう

新聞を破って
世の中に怒ったりもした

今は壜はカラッポカラッポが詰まってる

カラッポはなくならなくて.....

どこかの大統領が
ゼリービーンズが好きだったって

彼は何に喜んで
　　何に怒ってたんだろう

コミュニケーション難民

　　コミュニケーション難民

どこまで淋しくなれば
気が済むんだろうね
僕たち

携帯電話
メール
ツイッター……

つながりやすくなって
つながる相手も増えて
そしてほんとうに
つながるのが怖くなった

果てしなく
「こんにちは」と言える距離で
「このやろう」と言える距離じゃない
この感じ

いつだってリスタートできる間柄
関係から「関係」が逃げだす

「ハーイ.....」

地図上のふたり

地図上のふたり

彼女はそこにいた
僕はここにいた

彼女はここにいなかった
僕はそこにいなかった

そして
いつの間にか彼女は
そこからもいなくなった

でも
僕はどこに行けばいいんだろう

この
二角形の関係の中で

「さよなら」のバーゲン

「さよなら」のバーゲン

耳慣れたサビのフレーズで
携帯電話に呼ばれた

別れてから
すぐ
別に
用がある訳でもなく

何だか安くなったな「さよなら。」
「逢えない時間が、ふたりを育てる。」と
相手にキメてみたものの
「どうして？」と
あっさり切り返されて.....

こうやって繰り返し
僕たちが失い続けるものを
彼女は知らない

デジタル砂漠

デジタル砂漠

インターネットは
いつでもどこでも飛べる
翼をくれた

携帯端末があふれて
キューピットが増えた

ネットワーク時代！
世の中便利になって
そして
孤独になったのだ

胸を震えさせるバイブレーション

でも
何をメッセージすればいいんだろう

渇いていくのは
何故だろう

インディペンデンス・デイ

インディペンデンス・デイ

星の王子様は
小さな惑星に
たったひとり

彼が吸う空気も
水も食べ物も
きっと
会話も
詩も
何もかも自給自足

そして
文化も歴史も
政治も経済も
何もかも自業自得

それはそれで
素敵だろうな
と思う

特に
郵便がＤＭだけで
メールも留守電もゼロだった
日には

ドロップアウト・ワード

　　ドロップアウト・ワード

アレルギーのように
ときどきなるだけさ

言葉の輪郭が
ぼけていってね

例えば
友だち、と言うたびに
「友だち」が色あせてくるような

あいまいに淋しいのを
ごまかして喋り続けて

でも次々と
口にだしたそばから
はがれ落ちる言葉たち

一言一言から
体温が引いていく

　　「今日は、おとなしいね。」

マイッタナ
返す言葉が
よく見えない

１６光年のスキンシップ

１６光年のスキンシップ

いま、僕がこうして
君の中に入っていくとき
君は何を
考えているんだろう

君のからだと
君の感覚は
僕にも感じられる

けれど
君の気持ちは
果てしなく外出中

ねえ、織り姫星と彦星は
７月７日でも
１６光年も離れているらしいよ

白鳥座をわたって逢うころは
孫の
孫の
孫の
もっと
もっと
孫の代

そこにはどんな関係が
残っているんだろう

言葉を飲みこんで
僕は君を突き上げる
君は目を閉じて
僕に応える

僕は
残酷に気持ちよくなる
少しづつ

淋しくなりながら

アダルト・チャイルド

　　アダルト・チャイルド

シャカイへのハンコウでも
別にジコシュチョーでも
なく

髪をのばすことが
青春だった

ビートルズには
乗り遅れたけれど
We can work it out.

その分
目の前には
なれそうなものが
いっぱいあった

それから

それからは
ちゃんと反抗して
ちゃんと主張する前に

いつのまにか社会の方が
ハンコウ的で

「やれやれ」

人生がうまく
ほどけない

僕の起源

僕の起源

新しい
パンスペルミア説って
素敵さ

別の宇宙から来た
地球の生命の起源

メイフラワー号の
移民みたいに

僕の細胞の
ＤＮＡが
どこかで覚えてる

だから悩むのはやめよう

せいぜい３５年の記憶の中で
いろいろ抱えこんだって　ね

ＳＦ的な解決

胸を張ったら
ダイニングテーブルの向こうで
彼女が
４５億年目のため息を
ついた

パラドックス・ライフ

パラドックス・ライフ

そう　こうやって

僕は時々
人生を
逆立ちして見たりする

コウモリみたいに

天の橋立を
観光するみたいに
「なかなかですな。」
などと言いながら

でも
３６５日
逆立ちしていられないのが
少し残念だ

フラッシュバック

フラッシュバック

「人生は選択の連鎖。」
テレビのクイズ番組の啓示

つまり生きていくことは
ＡかＢか聞かれ続ける
問題集

「グリーンサラダと
シーフードサラダ
どっちにする。」

と、いうことは

目の前の
妻という人といる
これも僕にとっては
問題のひとつ、か

何だか苦手だった
定期テストを思い出す

設問ニ対シテ
正シイト思ウ方ヲ選べ

「君の好きなほうでいいよ。」

ティーンの頃からだったんだ

我ながら
ときどき
人生をはぐらかしたくなる
癖は

ライフ・ゲージ

ライフ・ゲージ

朝のニュースによれば
人の寿命が
また伸びたらしい

振り返る過去が長くなり
想う未来が長くなり

そして
長くなったのは
創造主の心配のタネ

だいたい
たかが１００年未満

世界一長寿の樹は
水と空気と太陽だけで
４０００年も生きている

氷河時代よりも
はるかに暖かい冬

寒い寒いと
大容量エアコンの
スイッチに手をかけて
少し自己嫌悪

「なんて世話のやける
生き物なんだろう。」

我ながら

人生鉄道の夜

人生鉄道の夜

さて　目の前の特急は
別れに行く列車
あるいは
逢いに行く列車

鉄道っていうのは
掌編小説になりやすい

空席待ちの僕をおいて
動き出す列車

汽笛が遠いし
人生も遠い

もうジョバンニほど
純粋にはなれないけれど

次の「僕」の出発は
何時になるんだろう

トラブルたち

　　トラブルたち

嵐はいつも予告を裏切ってあ
突然やってくる

本当に突然
そして　たて続けに

途方に暮れたり
する暇がないのが
神様のサービス

有り難く頂戴して
右往左往するさ

「ところで。」

時が経てば.....

名言通りになるほど
人生は分かりやすくない

コレクターズ・マインド

コレクターズ・マインド

「とりかえしのつかない」
とか
「どうしようもない」
とか
「仕方のない」
とか.....

人生の大半は
２度と戻らないないことが多い

２度と戻らないないことに
出逢うと
僕の収集癖が騒ぐ

ちょっとしたジャンクものから
最近は
ＩＰアドレスまで
手当たり次第
という次第

まるでね　いつか習った
エントロピー増大の法則

でも
人の心の中で
可逆的なものなんて
どこにあるんだろう

溜り続ける人生

迷い夢

迷い夢

迷い込んだ
針葉樹の森の奥

その製材所は
エバーグリーンの汗をかいていた

樹をひく音が止むたびに
何か聞こえる気がした

森が見てきた
人の業とか、人の性とか

そして何だか急に
童話の一節を思い出して

「森で嘘をついちゃいけない」

ＺＺＺＺＺ.....

暗示的な夢

それで
君の樹は
どこに生えているの

僕の樹は
まだ見つからないけれど

進んでいく
道も

人生の音

人生の音

いつも何かを待つのが
生きる前提のような
銀座四丁目交差点で

笑ったり
怒ったり
途方に暮れたり

いや
暮れているのは時間だけど
信号が点滅を始めて
人と人がすれ違うと
ちょっとスパークしてさ

あっ
この音は.....

思っているほど
うまくいってないわけじゃなく
思っているほど
うまくいっているわけでもない

はるか遠くから
聞こえるように

小さいけれど
人生と人生の
こすれあう音

夜間飛行

夜間飛行

雲ひとつない
夜だった

下を見ると
心の雲も晴れた

人間の生活と
街の生活が
光で描く

絵画と言う乗客
地図と言う乗客

いや
たくさんの
無銘の葛藤

タフな時間もあれば
静かな時間もあるさ

・・・・・・・・・・・・

よく晴れた夜は
飛行機から
人生が見える

どんな
人生だとしても

おやすみ、ぱろうる

　　おやすみ、ぱろうる

政治家の声は
大きい

テレビの向こうの国会で
凄むのを見て
あきれるぐらいに納得した

もちろんどんな世界にも
例外はあるだろう
あくまでも例外だけれど

詩人の声は
小さい

小さいから
特に最近はあしらわれる
軽く

どんな脅しよりも
人を動かすことも
あったけれど

.....

政治家が
今日も声をあらげる中
「ぱろうる」が閉店する

言葉の梁山泊が
なくなる

世界の半分がクローズする
みたいだ

でも
「さよなら。」とは言わない

いつか
起こしにいくよ
大きい声を黙らせる
小さい声で

真っ直ぐな言葉で

「人生のこすれあう音」

http://p.booklog.jp/book/24150

著者 ： 東　徹也（poemor）
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/poemor/profile

発行所 ： ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/24150

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/24150